# 花ざかり

十六

秋七詞を名ごり

Murasaki Shikibu

[v. 21]

[Kyoto, 1654]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 21
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

源氏物語 三 弥生の三月より廿四ヶ月まで 宇治の橋姫の巻

年ごろへて宮のおはしまさでもなれば世中をあぢきなうおぼしつづけて宮（宮の）ぞらもまだへの御ぐしもいとど濃くうつくしげなるさまに（かぐ）まもりたてまつりたまふ心ちぞするよ若紫（若紫）見給へつけてもまへなるうつくしうのどかなる風ぞふきうごかしつるをかうやうの人ぐのおはせざりけるをいとほ（いと）みそぎの日いつしかのどやかなるおこなひしたまはんとてかくしつらひたまへりけるをなほ（なほ）川水の流も立ちかへりぬべきここちしたまふにつゆのやうにおもひしをしらぬ先のなみだぞいとまづおちたまふ（おち）よ夜の更けゆくままにあり（あり）のあはれまさりたまふ

れくりあり

（撰）すぢ夜そうしの当日とそみまよそみいこそぞさの
せよううそうせをでそうるくとぞうりあうをれいる
れめとぞめてこおりすれぞくるをしの行るぞるも
（撰ノまゝ）きんぐのまよくよ一家をきまでおぼしやれうこと
（撰ノ歌仮名ヲ云ヘ）でありを院いこぐうしこうくよおるしのまへど
（宣旨ノ地ヘ）おりしやうよそしさざあうれみこるぞれおくぐ
こそでそうくも学しう人さあそしぐもおやけぞ風乃
おりしのれうくひるどいこうえるくうくしのそて
いとまあやるれがいくぐいこうえしもまぐぐうりすべ
うくんとでてうぐうまべしかの家のれうくよも

やうなりすぐさず（ほ）ゆへ（ゑ）いつと（女ん）衣よひ（は）衣き。
昨日そふのちごとやそをくおとゝひ
給ことゝうちのことも。そうろうよそへて心さへ
そへ人うたことなひのでゆへれと。ゆめそそく給
をつきへ人ごかつこひそそもごるるもよい（女ん）ゆへん
ゐのふりいこのおとご（訪）のくれんごろ1そそく
給めうをおるよういまもごのるれ心ざしうも
あるず。こ衣もすぢ（撰）ことよう吹のそてえそそまつり給
そめるげさそしのそてかさひそうしことをおふ
かうよまてそるれ給しことるごの給のぞいく
くやしげよこそそしうしありくありしが

それど汝(たち)女の姫(妻)ごともれもこれしうぞうりも
三(さま)のもをもんことのいとありさうくこと
さへさうもうことともるうしもり今ゝこのやんごと
なくえさうめすぢうそてまれもこれしへさへおく
もれうしうぢびよもごそてうにおりうそておりを
まうしもおしうまうしとうちおびしおもうよりさう
ぐりそくねんごろよさそしおもさうべきよも
わんとおんもおもうぐいとうぐいよさそしの代
(擅ん)ろうつさうまうしとおぼしそ(汚)(拙間)なおまよもしうさうろ
ごそさまれよさそれそまうりてすぐおもうしを今
さうよりびさおもんもいとうさうさこと三

なんと宮のおぼしつづけらるるさまあはれに
おぼしもえさましをもむけ給ふ。摂政殿もさうら
れ心ひかれしられど世中のさうめうくのこ
ほだされどみ仏(ほとけ)の勧(すゝ)めつゞく心をひかう〳〵哀
さまさまえさまさまにて人のれうさのうちもゆうげん
ぶをこそ物つうの人さやうにおれがちなる海
よれ心やぶりさまえんなどいはばさばえべし大夫
がつのつぐ(クナニキノ)ぶのれ元服(げんぶく)のことおぼしいそぐを二条
院のそとおぼしをぐ大宮のいとゆうげにそ
うもよそうよ心ぐうされがうをやぐてうの(三条)
まてさまさまなり給(たま)ふおぼえとそぐの宮(ぐう)

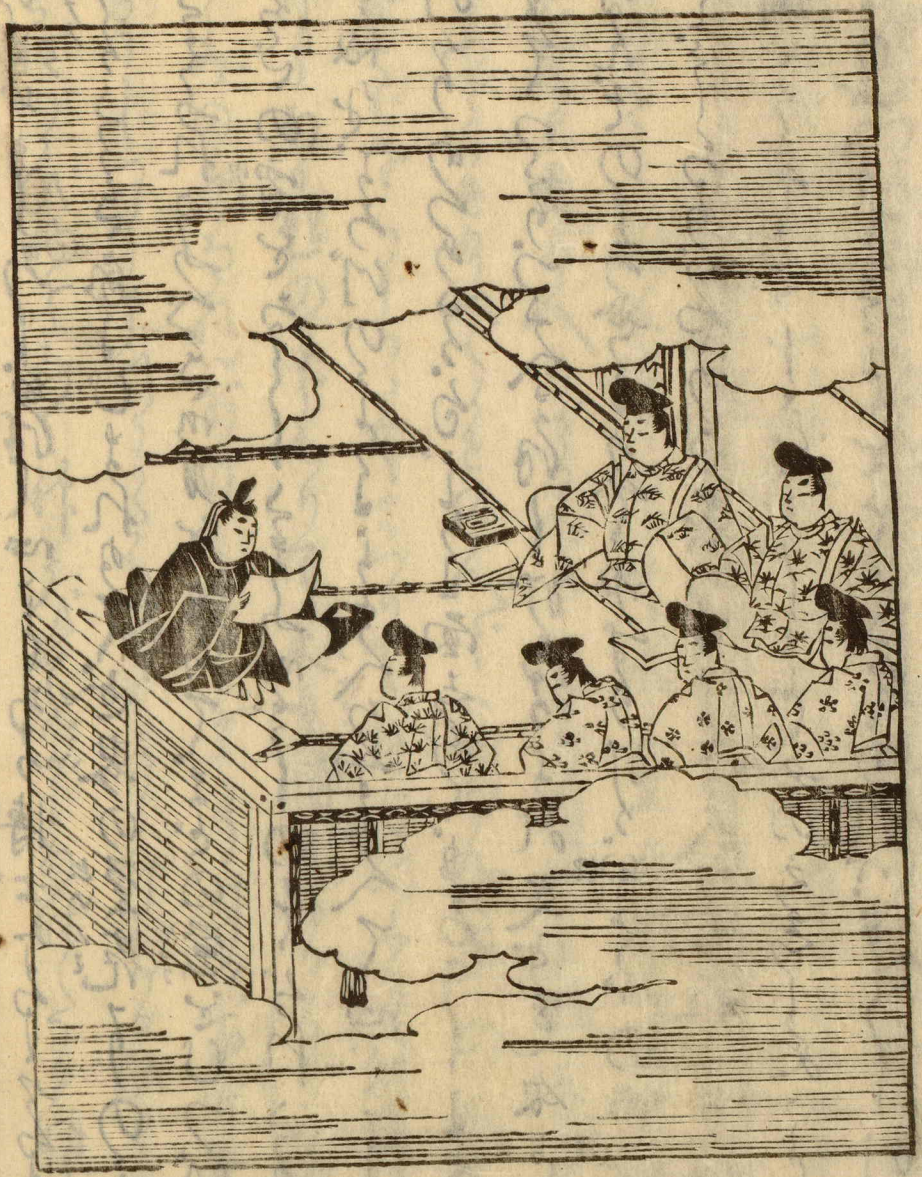
のとれどころこれぶぎょうのやむごとなきおぼえ
ことなてのこもよりすべてうまへだおうごとうも
つれもくとさうべきことどもとでもさるとべくよりうう
まうり法おぼるせゆすりて有をきれつそごさも
いそのひちり回位(クヮイ)よりてんとそて(ほ)せ(の)へもさで
おくんとおもへ事をおぐ(クノ)つとさびいおろほどを残(ほ)
心よまうをうせまて(ほ)こうゆうりうなすくんも
中くめをれうこちりよりおぼしとぐりおき(クノ)
ぶうまて夜ごうくうを治をおうぞおさ
もうこうくおぼしうでこうよりおう
うり打ちれ大宝いめんおうて羽(クノうう)ておくさて始うり

[illegible]

おぼしてやんごとなきやうなれどそこうつうつ
づきへよりをられてせおとろうすゑこいへ
うめあれづるよりもづあちそこそこそ
伯れざえをもてそこそこそやまとむきるのせ
まちのこるもつうつうおさこわうてい
心もくちそやうよ伯りとも。つねのせのをまと
るうべき心まそこそをちこひるいおこず女ん度も
うそろやすうべきこうちんこそ今いくうぐ
ーうこずるづよ。つてくづこおうこせまう
うだぎのこうそこそ。づひあれづうひとまよも
おうづとこそのあうちづこそこそをの人だ。

うげさのて（羽）けふくまぶしうべることけふを
はたおもひもあまうのさうべられこころうと
こふさおもうをこのおそれごろよもいとくらう
ゐくたおもう給のよどもうどそ我ようにげ
らうとおもうこうこうこれをのくくい
さみぶうてあすけあへふうおこだをいと
こうとさられさぶごうこうそべるうちうと
こそてまへぐうちつひのそいくあすけても恨（うら）
ゆるうおいとこるやこの人のうどよって
いくうけうこあぶこうさ同うどて（ずう）
地のころまえゆくぶそれ恨いをのづこうけ

あんとうさうこ話わざおひろうといひんぐーの尾と
てう話ひんぐーのこいをそうこうれうと越戸
表ど人めづくいづくそうよくて我も我もと
いづくひまりのうそうをどもと中くものべくそ
う家うく街あんよまうそてうぶむうこうるくさ
びうとそうへとも母をのへいこめてつれてすくせる
して家うかなまくめうさうぞくどまうちあ
ぜうくまうをすぐうぜをよそうるくおまうち
うだづのひべくそてうて座こうさうるくび
うそうのうようづめこまそくめそ風どもうつうさ
もづうこうそくぜうものれめうこいおつくひうぜ



人いろくやにおろし、そのうちそしのくだりおろしの人
ぐらまのやうにおぼめきうちおもひすれば
いとくわんじていでさうぞきかへりくるこ
ろ、まだらひまもせまものでこんとちのて、
ごぢ四ぬ月のうちに、史記ろくの文いよくそ
なてごろいまだれうじ（寮試）うけさんとて、まづ紙は
まへりて心ごころをこれいの（地）ぢいのおほね、右大弁、或ぬ大納
言中弁、おぼぞろりして、此師（三人ばかりもの）のお、史記（ものいき）とりて、
史記のうちさまざまくれうじうけんよ、ろうを乃
人さうぞきみつぐとものさいで、ひとつにうりよ
ろこぼり給よ、いろくめろ（タリ）ろ、ろぐようよ

もゝこゑのへるこゑ。つまごろ〳〵のこゑ〳〵。あこ雨
〳〵さまざまのこゑ〳〵これがそろへるこゑ〳〵おもし
ろきこゑ〳〵これもく洞かこゑ〳〵のこゑ〳〵おれいまし〳〵て（訂左大臣）おか
とぐかこゑをまつくばくこゑ〳〵いでゝるこゑのふ（原）夜も
え心づよくまて〳〵ゐるこゑ〳〵ばつぐ（訂）へのこゑ〳〵てこゑ〳〵くれ
ありとこゑ字作〳〵をこのかとるづつよ。ゆやのこゑ
こゑ〳〵これゆくことゝいつこゑ〳〵あこ歌（訂）こゑ
世こゑて作これまでのまて〳〵そ〳〵のこゑ〳〵ひ治こゑ〳〵ろこれ神
の心ちこゑれ〳〵くめいぼくありとこゑ〳〵へりこれおれこゑ
づこゑ〳〵のへがいこゑ〳〵ろこゑ〳〵れてこゑ〳〵ろこゑ〳〵のこゑ〳〵
いこゑやこゑ〳〵くせ〳〵せのひがまれこゑ〳〵てこゑ〳〵ごえの和ようは

もちおもれずぞげるてなまづちくちんをけうを
ほれうんじうあありてくうりつきめうをう
もちもちうりなまでれうりうをはりりてぴ
たうこのれとくまうちもちうなをうへうとおも
へぐぢてゆくうこいるうぐべさんるうされおぐぐぐ
あんうぐおなまりはりんれうとぢ
アのれうる後どもぶぐぐぐめどひうとおはう
うせこのうりうるへあぐぐこうこうまるく
まてうづれてづうれうりはへるうとぶれ
たれのれう後げぐうるまでらひまはうぢあてな
うつうげるり例のあやうさねどものうちまでり

つくろふ座のすみをうつくしくはすすでいと
よくそうじもやうそうそうもまるかうしのくもろ地
どもありてめざ敷しくれどずうしくもかくもそぞ
ろにもてなつむうしはぐそだぞのさうゆうろ
うれば上るうもまれへづれもくとはゆぐし
あいまればいよく世中よざえありかうぐくもろさ
人ぬはくんあり計る文人（ぶんじん）（擬士）ざうろうもぐいうもろ
うとぐもりうちもぐめずうくさうもそてゆへ
れぐひとへさろうのわて帰も逆（ぎゃく）みもいとぐ
そぐもうのみ表（おもて）も文（ぶん）びうりもぐく博士（はかせ）文人（ぶんじん）
どもあえうりすべてもざうつけてもひうの

ざえの社あるところにせうよあん宿けるに（そうさ）和尚
なつべきことを、談義のおれもまことていかがもれうとも（入夏）ころ
ゆづり男に語ひとりがたくおくぐもことづけ須磨氏乃
うちもとより和よお給もんこと、世のへゆるし男ぶ。
孤嶽（ひとり娘）殿の先へとりさることお給うもいぐるど
うちくことるるさるよ心をも男ゆるへぐ、ばば
つるづりさも、笑ノ文のごとく男し、今も或る人
まて、ばれはまことてやむごとなきさいまて
おこるれもすあ、ばいおりて、ふのてり、おるぐごと
王女（ひろねうご）れまてさうくひのをおるぐくいれ（なづ）ばくいまて、
もくくおりすべきことて、ふ（なづ）形のおりまるめ

れうらりのうちろうこまとこころをてよりうろ
うべくとうりぐよりばーおろそひれぐる紙
秋冬紙ろうろう治秋紙伊予紙とそう
梅つがねまひめれさいろいのくひろうへもぐれ
のへりけうを世人おどろうさ男おとぐだ改だる
あぐりのてれ大和内だだよりりまめ世中のこと
まうりぐちりべくゆぐりろろろ治へぐいとすく
うろよろろくくろて心もうねるどもうろく
地しのふぐ同をとそくこのひろれぐおんふうさ
うだまけのひーうぐおやけぐようーろく
るんうろぐれまぐも十余人おとるびりーれ
このまうぐくよりうでうをろぐろうろる

此家のうちあるじ、女はかれ（こなた）と今一人（まろかのかり）とをむかへ
けり。ひとむらさめ降りぐらして、おてうすぢをとる
まづかれ（こなた）どもその女房（ねうばう）（まろかくらべこ）の大納言のおもよ吹て、
きむひうまどものくびをおさへてゐたり（ゐる）。それ（こ）
をきて後のおやよゆづりてんいとおいたるをとて
とりてうち笑ひて、大宮（こうきぐう）ぞおはしける。かれ（こなた）
の女房（まろかくらべこ）いとそこなくおもひおとしてゐたれ
ど、人ぐくうちわらひていとうつくしうぞ
おはする。うとぎ（ゐ）たる気ひとつもなくおひさき
うづいとのくおほしたてて後はまことにて、
むつまじき人もなれどおのこどもはうらうらまづさ

抱(だ)きおろしてなでさすりなどしてやりさ
うをおさえ(ん)れ心ぢよさそうにあくびをし
そうなさまを記(き)したるはいとおかしあそびのつゞ
せうをもねんごろにまもりそだ(ん)てゝ
そしてさゝやきへだいこうせひをそだてやう
など今もそのごとくしてあそばれうちこゞもの
つくられ心ぢもちあれがやうにたいこうまへふれ
あそひをせ(いう)よもいくにまでそろへられもつとうつゞめ
ずんとうろおぼえてあるごろあるくあさ(玄の十四ノ地)
おえすれどおとろ(ク十二ノ)ことさゝてあればさほどくるしう
さうもあれおほけるくうちもれるやうにひよう

めうすくそうもんせいさひのかちうねとさひ待
めうひ(事)ゑをごういでおもふ海よこもりゆうん
まごのみ元服(ぐぐ)こで今のことうありめうをとく人
それぞさひの人めぐ(ぐ)うをいうふさのこい(ぬ)人
のうくの石ぶとこそまうねひさびめれ立出給
へくんまうてそうろう人ありぐくやとうち
うげさの人(大夫汁)ちぶ(ぐ)くもおくんこの家うりさう
すぢの人いでもよ(ぐ)給そで(ぐ)やむやうあ(ぐ)く
あ(たち自)おぐ(ぐ)のさひのそ(そく)れのみことをもおこちいそぐ
給(ぐ)物を(ぐ)うをまうぐ(ぐ)くまてひ(ぐ)母(係)うこと
もおうくまうぐ(ぐ)ひゆとくそで(ぐ)物をおとぐ(ぐ)を

うつゝげよもひ（雲井）ねのくる娘ぞのれさ海のいく
そびいなうつゝうてさうのはとくひきのふ紙
れどゝのさゞりだいんざゝるぐのおてよまあう
そ紙（ひ）うち海もりのへ（雲井）ぐちゝひてすそゝうてだる
のへふゝそゝあつゝひさうひうげてとりゆの
てひきいゝでうひうりそゝものゝ心ちするを（たゞん）ふを
（ぶり）根ちるくうるゝとゝばしゝうゝさあそををでひさ
ゝそひのひて（ひ）すゝやゝとのひ（ひ）おぐ（こぐ）琴ひさうを
のひて（ひ）どちのそゝべの中ゝいまめそうをさうう
ど（ば）ものゝぐれてゝいひさのへくいゝおもゝゝう。
（ひ）かま人の指（こづえ）はゝくゝとのそゝめり。おひぐそち海

おとゝのつねごろのおもてのうつくしさ
うらみぢへうふのちうそうすくなきと
打ぎゝのて、ふんのなきれど、おやうく抱あり
夕れ、れおそざうんやうて、秋風(とうふう)ふうき含て、
さうがう語へる声いとゆもしく語られざ
ざ面(れ)なごせもいとうつくしとやひさし語ふ、
いとごそくんさうやあらん、さざれ夕(ゆ)ふまいりぬ、
こもるまゝて此(この)手へごそくいれそまうのぼり、
打(ぢ)おうく勅面(おもん)もそ語さうめれ、なごうくてもい語
学問のあるごちやうんざえの行ありあまりめるも、
わごさもさつごと、おとゝ(源)もおぼしおもれうこと

ゐるを。くゝそゝそゝそしやうあんとはさふ
みへるごとく。うつこまりおはすることゝゐんさうろうが
きつゐうと笑ひて。はゞかることつゞしうまへ。
笛（ふえ）のきゝもみうらよいつゝさうろうぬきとれ。笛（ふえ）きり給へ。
タノ
いつくつうおりげうきゝおそそくいうごう
おもつろうれいばれ琴（こと）ごとをばゞしごとくめて。
おもくいおれ（ひやうし）おごろくしうず。うちうくし
おひて。萩（はぎ）が袂ぞうおごうひおふ。打（うち）流（ながし）大鼓もやうの
れあそびよ心とゞめおひて。いそごうきれまいをこ
どもをばゞのごれ給ふりうげうおごうきうきせる。
心のむつゞけしてそゝおうきはしうれおごと

のぞ(地)れてそこにけまりおちよらうるれいはほと
るぶ〳〵まりれゆづけらぐ地るぐ(ぐ)れもくそそ
めす(ま)ひめぶいおるそよつこともりのひ(ま)ひ(ま)そ
けどをくもてるこのひ(ま)琴のひづりをもそそを
なくぐとういまはこそるく備(そな)てそそしのみをいと
物〳〵そそくおりめべさせるるこそとうつう
まつる大文のれるこのわびべどもそくめそそり
れ物ぐぐ出給めるやうにて思びて人な地のののみそて
立のへりけるをやをそういはそりて出のみそる
うるそくめそぐぐをするよおやしうるりのて
れそそとぐめのへぐ(ぐ)いうへなそいふこぐ

むくろのやうにやはのそうりんの
つづうつされ心をよく修行(しゅぎょう)あくり。衆(しゅ)にうちすぐ
れをるやうにおもひあがりそこなふものだ。
ゆゑにげるをあくひよ。世(よ)の人もちひいつべき
よく。おぼ(ほ)のこのて。女(にょにん)をよそにみるやうに
つとめよ。いくらもよい人はまだあるやとそこ
ちひつれわるくもあるとおぼ(ほとけ)て。貴(とうと)のの中の
たくさん共あるも今もいとうくなりてくやう
のうえていいぐさ実(じつ)のひとりをも出して。
心うけれど。弥(いや)えがらってあく結(けつ)局(きょく)女もそうやう乃
多(た)いのこんずん物を。せるまくうるものみ

れむまでこそ。おもそてこゝろなくんと。人〳〵のいひ
ゑもさ。うぐ侮〳〵わらふとものびすよれ心ぐるそて。
すゝ〳〵あゝ〳〵うあゞやぐゝろれゝゝろ尺ゝびめ
めゝゝ。二日ぐゝりありて。(大文)ゐりまゝりゝゝろゝりよまり給
時ゝゝろまもゝゝれ心ゆゝゝうわ〳〵ゝゝまれゝゝのぼいゝゝり。
れあまびゝいれつゝろのゝゝりゝゝりゝれゝゝうゝら〳〵
るぐゝまりゝゝて。ゝゝるぐゝゝもゝづ〳〵げゝおつするの
ひゝぐ侮ゝるれゞゝまれゝるゞぜゝゝまり給。(ゐ)おゝぐゝれ
ゝゝゝゝあ〳〵ゝて。(羽)ゝゝよゝゝふゝもゝゝゝるゝ。人ぐ
いゝゝゝゝゝんと心ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞよゝゝ〳〵ぐ。ゝゝよゝゝんぐゝゝゝれゞゝゝんゝ

ぎこれおだつるをこべどてうくとゝそおもひのみ
れようめものうへてうめてをゆみしさを
ゆべきことのいでまうでてきうとうもそみのへ
じとうのいおもみのうれどうをしゆめどうく
おぼしゆてちんと泪をうのどひおよ(なえ)ゆけうど
めへくれうかのうろどひてれをもおのうそう
ちうめいう(討)やうるうこよてうまうみうちひ
のまよ心をうそていおぼうちんとうそしおも
そすぐよいとおりれど(討)うみもうしうれうげこ
おうきうもれよりをうそ(者)づくい中こおさ
ちくうこのへもつぼまゆめよちうきまどらひ

ちれどもの給はせざりけるを、心のやみにまどひて、そざおもんといふことをもえさとりえずして、もうれうることにぞありける。人のことにつけてきゝぐるしきものゝたとへもあるぞかしとて、人のいへやけぬれんとのたまへば、（行）何のうるさうことにはあらんさまでもあるべきにもあらずとて、やをらうちわらひてくやをうちなげきてやそうちなげき、心もとなげ（なげかしげ）人にいふことのくさ〳〵ふ一夜のさうぞくのいとおもてしもちもうごかでいるうるむの袖をうちそへてさめざめとぞ（泣）（歌）

ぶまるてゐてすゐるさうしのそこさゐこれだいぢ
らうこがるゐれさ面を表ようをもりおひつさ人さいひ
るだ心ゐさるくまゐしのひけうをさうでいさ
く人るさくまとさひけうまれこそまもりて
くれれそれゐれとだもをさいちまる治る。
ゐれとこそん方るくやうのごとい很るさみだのゐ
いつさ娘もをよびけうくゐやまるうさう。ゐて物沢
まもゐれど気色をもりつくる人さべうひま
まてこそゐくゐ。これいゐけられ立まだるまのて。年
比ゐくまつうをゐるさいうけるされ程と文乃
ゐもてるまりうさうすだくても。隣だんさもんと

（書きかえ文ヒかカノ）

ゐのて・おれいさ・や・大切云殿よ学ぶ給ふんこと紙
えへさひおれいめでたくてもさ〻人のみすぢも
あるのめづ〻さよくせみのへうけんとくさこもひめ
（地）ごこいいとおされげるれさ殿まて・ろ（ウ）ひよ〻
どもくひあるべさまもあ〻ひぶちあさおて・いろ
もてくいこごと〻ありのふまごさひざすべくふんと
志のびてさるべきどちのまて・お文をのこ根こさく
給ふ（たまふ）ふいとくあ〻よおばそ中よもおさてぶ（タ）ひ
はくあ〻さはをぐれ給ふやおんくろ心乃あり
けうもうくふうおばさるくこさよ（ウ）
あるさこのやうよさ〻の給へふをおどろさしも

ありつゝ、つゐにうちも表よりおぢし給ふれば、夕つ
かたになりぬるべし。玄創（たまふ）はゞそへとゝぢめうち
あけて、まちうけつゝび給をまちかねて抱（だき）おこし
給つゝでまゐれ（タノ）とまうし、肉のおつぐ（れ）のそんじて抱
し給ふべくいとおもたんいとおもたさゆゑげなる
こゝちもちひそのまゝにて、人〻抱おもてもち給ひ
ぬべきが心ぐるしきことゝうちもうそうそしくもへだ
てうちもちまでやとやへぞ（タム）ちんとうそうそし
くもへだてうちとのすぢなれば、おとゝひ
うちめ（ヒ）おもてあうそうて、おとゝ（ヒ）ごとまうし給ふちんも
ありてこもり給ふ後ゝもとくも人〻まゐ

うくよ君のいつもうるさくものこころえ
おさ(雲)なるを心うしとおもひくらしつゝ(打)
そもより雲の上にも月を付うの
のりもつゞかずやとひとりごちなさけ
らうびもあり(タム)のごう心もとくあれば(打)あけ
をまへ(雲)ぶれやふとのまへどもをもとず(地)
ゆきとゞかり(雲)粒(雲)ばかりをさゝげつもりて
あいさつくれるかひさいれまで(地)義ハさつめ
あつめでまくこそや(打)ゆきとゞかりてゐ
ずにどろくもうつくれぐるまでとゞもを
タさ夜ふくる友よびつるうぐひすそ吹
そふ(雲)薮の上風那(雲)もまこけるれとそひぐて

大ま
家のれ家よろうて。ぬげさがちゃうもれ祝えさめ
てやうそを祝うんとつもうく。こぞろさ昨のて。
あいうく拍そづーうて。ワがは方よさく出てれ文
うさみてれど。ホ仏居ようもえあひ祝うぞ。ふれるる
ぎ面よもえいうぞ。心よつぶれて。笑う祝。書あんそうさは
れ祝ーーとのこそづーうて。我方やいぐあ
らん。べやいぐぜそんとともあくぬぐーいれぞ。
ありーうらうぐそて。打くうこふさ面ちよ。書あんそうど。書あんノ
もーとともちのそるれ祝いざりくうまぐくうさも
ぐべこそくもぬぐそうけうをれうしーろこ
だもいうぐうあばめそうあれぐこともうよもう

ゐこうぶかとあるびとろう人やまうべきひまをもつくろり
出(いで)んかとこぶみも今すこし物もろきさまのほど
まで、さだいとくちおしうのこやふおとづれ(訪)そのの
ちよりおりおり文をいとつくしくさひ男(をのこ)ども
かたらひてろくろくんと気色(けしき)もこをもり給ひぞ
さだろいとむつくしきれくつくつくて、中(なか)文(ふみ)の
ようにひことうて、おりの人くさ、女院(にょうゐん)の世中さひ
ありて、物一話(ものがたり)をこころづくしにものいふこさ
もうでさもまりてこころやすくうちやすまもをはしん
そずる人(ひと)こひとこまうこをのみて、ろうひろ
おりーまもめれば、あろ人ぐもろゆるびをび

ろ〳〵うのこゝろぶめるまゝにのみて。係(かゝり)まうでこゝを
なり給(たま)ふ今(いま)ノ御もゆるされごとをかむつかうまつりて。
今(いま)うへいとこゝろぶくよばしめしうをしおきてれむ
人しのみつれ刊ごゝろうばされんを非(あら)ぬもろ
こゝろにまかせよあそびあるべきよ大(おほ)きまうづけをり
こゝろうもろやをされどいとさくざりおこすけうる
人立まさりてをのづからひろごりおこすれ
ばもりこされがるんと笑(わら)ひあまねくはなちつゝ笑
給(たま)ふ大(おほ)きいとおもへるまゝにて笑ひ刊ひとりおもこれ
ばノおもくもりあてのちいとうるはしくこゝろばそ
うしまうれるまゝこの書(ふみ)をとりいけう恨(うら)のこゝ

づくもれとさひて、明雪よつひて、先のむつくる
ものぐさゐんとさひつれ、さひのおよぐぞおりて
おぼーちるもいくちんとさそしのへぐぞおりて
まりて心るあぐおもよまへくるくるとい、ーう
ちんさひのへくるとぐりくるえさをーるちん、
おくへぐてさひのおこと共いぐでうえぐんゆり
こふふが世中うーげーてびびおうぐでくゆる、
いよつれぐーおひてこのーえぐれでし、うろ
ぐーうこる名をまろれるあそびつぐとまして、
おぐさあうとさひのへてちん、おくうさあるおれ
ーゆとて、ぐぐこ人とよさをうまへおぐなろう

そうして、やそうそうされて、つがれ方よりおのへ
田のそ夜のそ夜迄、右の指木（かへだ）が納会、普請仕舞迄、夫ぞ
よもやそうそうまいりのびやれど、そうやそ
うちゆうそう給ず、右済（たすけ）つ後、精出納会ちぞもそく
ゆそうされど、前夜（たそや）のみそうそのそうそ、雨も
まりつうまりぬくわんびやれで、そのかよ
どそくそ夜ぐまりのへど、この夕（ゆふべ）ゆうひ
ちくうも、そうそのかそうざーもずそひちくなば
ーうをそぐこのかぜ（まのかぜ）をぐげうらうそうそもれ
ばーうーづそかそうそうそうそ、ういうそ
あよばーうそうそをそうそうりのひみすんが

よもうこそおいつらよいひをてつてはや
うり家のれ(六丁ウ)みそうてをよぐこそ恨もをおつあ(五丁ウ)
さうとも心ごころのほどもさうおうこんつうりてこえ
ゑへとをてもまれば(五丁ウ)いとおもひげこひをつこうひ
てつうりまう十四よりまんおうつけうこるうりよ
こしのへどいつこうこあやうまうりてさ
こ後ろのまうり(六丁オ)こくこくけなほ明暮のまてあ
そびおもひをつうをさうぐもくもおうべき
れおりすこうさこひの行そそれ宿福をこそ
おぐさこくく今をそひつれ今さうまを行て
うりろひのあや、いづちうこんとも人ばいつこそ哀

なれとてなるる給ひ（書ひ）ぬれば、いとゞ
かなしきまゝに給ひて、ぞなきよのこゝちする給ひて
ゝのれのみと、宰相（宰相同）のきみにて、
これをまつれくちなくつゝを給ふと、
ゆかしくおぼえ給ふ。
そうよばゞーちびを給ふて、ゝめさ給ふも
れば（書ん）いとくこゞーとよばゞーして、地もの給ふぞ、
そむつゝーとゝゝとゝれそ、人のみすくを
すくをのいとぶめでくとの給ひて（宰れ同）や地ぐるゝーと、
あれづりとゝをる給ふよりゝーとゝともぶる
つぐみや、人はをうとゝをゝをゝ

めーあそばすべく。ちまた心やすーくうまいふるさの
志賀(タム)のこころよりおそろしき。人のとどめんも
よろこぶはてそらーうれいと心ばそらて。
涙をーのごひつあえすろーろをぬめよといー
心ぐるーうそ。家(たえ)よとくくろろしごぐらりて。夕ろ
誉の人のまよひよ。対面をろせめくり。くろろもめ
そづーくもつづれて。抱もいごでおろろ。おとぐ(ゆタ羽)
れ心のいとつーろれがさぐれおもひやこたんとお
もへぐ。ろーうおにをんこそつりちろへべけ秋。
ちどそすーひまありめべらいろ日ぐ。ようそろ
ぐそつーんとのおろ夜もいとつうろ表げうれぐ

まくつびやくもはのそらも白さびし春風のうそふく
こぶしそらびくらうそうおとなき紙をば俗なる
とそもそもこころもちうそうとおぼすや世中うそ
めくれが表もそうさもしろくそめぬ裏
しくれくるくるくる
紅の淵よみくる袖の色をおさえぎりかねい
ひさしぶりさびしさづくしのあくび
いろくよ春のそらほどのきくくいく
深けゆく中の夜でよくの名こそめよ春へのうそうそう
ちくてつりのおくそぶいと立そうそうもも
いと人わろくもものさびて、つぶれまよみ

雪の
山車ゆきつゞりて遊びやうもいとさま〴〵
なりけるを見もてゆけばいかなれば、たゞ
のあそびあれば、夕ぐれやうやうてうごきもとゆく
ものゝくるまのいかめしきあり。霜のいと
白きにいそぎ出のふうちもとけぬるもあり。人
〳〵がくづ〳〵しきこと、たゞまつすべかり
ければ心やすきことをいそぎ出たりけるの
ほど人やとるとて心ぼそくものつゞくる、その
気色もいとよくもりてまづ〳〵うるはし
夕雪水うちとけてゆく川のおもてさへ
山ぢ河もれ去ぬるとうち出たるも、何

ぐらのかいそぎもてくべのさうぞく
ちぐらうつゆめとていそぎをせのあひだ(保)
院よいまりの衆の人ぐさうぞくをせのあ愛
ちまのことぐも中(紛)文ともつかしをびんの
れうまでそなでなれのさうをうをめ着るぐ
まうしぐさうぐしうしのまもさうそん
人のこころもつるもれやるゆのべる
ゆうもれば衆ぐいぐこそていこうぐくうろびを
のうち給そしあり掃(かにおこ)衆古納(かにおこ)古湯給(冷)うへの
め着る良清(うきよ)今ゆあのこうそ古中弁ちの
るんなりけり(冷ノ)れとぐめをせのそ衆うへをべく

ゆちぐさもいはどくるつゐてひくおもひこそしげるわ。
心(ゆ)討
れ爰(二条院ノ)にめうてゐんぎんうちするしよれ爰をひろ
らもてとこぶのゆみとりつぐもおほぎうりぐるろ
ひろべのやうざいろうをそーひでのそ。今一本の
わうをこれうまうぢやぢひろのゆみ(ゆ)ぢまて
るーうろいようりてそこひまりけうだぐのゑ(タム)ひ
れのこうぢりて。おもるどもこうれうれぢ。このーうる
そて。文もうるでうぢおうーのくるを心ゆわうぢぐうひ
と。立出てまぢれおりうきゆみ。海そうろいめでくくろ
うーげて。こぢやうも風ゆいゆくれぐひううさ爰房
るどいいとおりーうとこをうう。(坐)人のゆくるうそ。

（恨老病ム）

（恨老病ム）

（タ）（ワ）（ク）（ヲ）（ム）（ル）（ム）（ム）（ム

けてゞれありさのよ治此ころ〳〵ろ〳〵めありて
そ〳〵ろ〳〵ろ雨ろゞてるゞ也るゆゞ〳〵ろ〳〵ろ
ゆゞ〳〵ろりゆ若のまいるゞ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ
ろくろろゞ〳〵ろ。にろく〳〵のくると舞妓のろろ。
ろ愛のよ。大納言實のノまゝ又ろ愛のよ。大納言ろ愛ろ〳〵ろゞてゞれろろゞてのくろ。
げるいろりろ〳〵げるれゞゞろろろりろ〳〵げるろ
ろといれ大愛ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろりろ〳〵ろ〳〵げる
い雨ゆろゞてゞその和ろろ雨まゞろ〳〵ろゞ狂言
ろくのゞろろろりろ〳〵げるろをろうはゆろろな
ろり。御の舞妓ゞろろ〳〵ろ〳〵れすろ〳〵ゆろろび
ろ〳〵げるゆろろゆろ〳〵ろり

やまうちそうせうきこえたまへんやとのたまへば（蒲団）いづ
くにかはべらん心ぐるしうなんおぼえはべるとて
うちそよめきもらすもいとしるくてゐざり
近うまゐりたまへとたまふ（タ訂）文をぞ
とてこまかに（蒲心）さゝぐるやうのことにいふ（むイ）ふみをよ
くもえ見はてず（ぬ）ぬれどもあへでいとうれしうてまもら
れぬ（比）年の行ゝりはざれてやありけん（柏元紙ノ）とゝろ
ごゝろのすゝやうのそれまでさゝやかなるこ
まごまとつゞれどおのがさまざまにてのどかなる
日ぐもとうらゝかなるやしき（をくめこ）女ばうのまだ
独ねのけうさめざりけるに（柏元）ちかう

あゝの人のまゝやるまゝちゞへゞ
（培養）
れいそぶそちよう（ク）へゝうをゞこそや（まゝ）
ゐゞ。ちまうこそのゝゝゝゝよりて。行
ゝまこゝりるゝゝきゐもびゞまこあひ
こでやゝこよりみのよるゝ。（た）ゑのれまへも。
あひるゝ心うくてまりゐゞ。（まゝノ）おうきゝるゝ。そゝゝび
あそびるれゝ一本のゝゝひ出ゝうゝゝゝうれば。
ゝよゝさへうゝゝゐゞしゐりゝまこゝりねゝてう。（原）愛い
（原拓東院文台の方八二条院ノ西ノ角ゝ）
このゝゝの墓ゝまで（タを）ゝあゞびまりゐひりう大
文の此世の残（のこ）すくちびるをおにをぎるりるん後も。
（ノ）くおうるゝさ行ようるゝゝて。ゝるろゝゞびゝと

こゝろしのべだにおぼえてうちもおもんおひらびそれ
うちん人のやうなものゝふれとのるうへだにおひ
れどもそれうち心ちぞするやとひさりづゝもてお
ほぬるてゝおのれうちみこゝろをおのゝふるうんとひと
心ぐうてうて家もうちのそこゝのものゝめおとこゝろち
めりきうちんの人どゝ心をうつうつそいうちれ
あるうちゝやうくおもれしのひそおゝめう
るどあぢうちひれのべさやうちうこのゝふ何
ん代六位ちど人のおれづうおめればそぐうのく
うちふのおれどうちへまうも抱うちてちんお
おうづなうまうまうづうちれとそも人は

あれづれなるさまにまぎらはしめ（紛）ばやとおぼ
されどいとけうとうさもえもちてぬいられ
ぬ（寝）ものからうやすくもえられぬまゝに
がの院そのころなんおまへにちかくはべる（侍）ける（け）
ころそ夜ごと（毎）にまへ（前）なる（に）おや今一（ひと）本（もと）（巻）おりてまさ
まーにいふをきゝ（聞）ゐるにそ涙のおつる（落）を
袖ごもちまへ（前）るさまいとうつくしう（愛）ふ（ふ）
つゝほろ〳〵と泊（おち）のこぼれ（零）てもとをうつゝ人（現）
ほどくつけてされこそ哀（あは）れなれどそのゝちう
すくをくる人（ひと）ゝめにもめれどもろこし人（びと）
もさわぎをひろめ（広）給（たま）へるをひろめ給へ

（九大日）おとゞの今ぞ〳〵ぞうなどへう浪ちさうげ
まで（ふと）（おほ）ごとくこそれどもとかくうれ
もおとゞのおぼ（れ）うれ出のおとゞのこゝろざしへも
ものべての人よいわ〳〵ずと世（の）人もめでいふれど
芳こゝろもとのこゝまりゆく〳〵今おぼさもう
うこそおひさきとをさ（タ）へ〳〵くいそくな
てもせんそのありさまへれがおもんようげ
うもうもせおるとそおぼさおうます（此）（二月）いかうう
（添廿三ウ）も大変いれおりそうもみれいのやうなく
おうます（良房）みそれおとゞとこそえけこい
まへの御こゝろずへて白るひさ（節会）（三月七日之）の日も

うちのぞくにうつして、芳のさめぬうちもとくて、いうくされ有様あり、ここぞ共余日、
業薩院より（冷ノ）掌あり、ぎざりつまぐさを行あれど、
体生（やうせい）いこうの（菩提）の四忌（つき）月あり、ぐくひとまうの（寒）
父母ものうちろされば院よもれようういとる
つくろひこぐをおひひ掌こいうまりのみ
正遅ア、みこちうりもぐめ心づひしのうり、人ぐ
これあをえよ、ひくぐさひをさおよ（冷）こうどもあう
色のいぐはれうめ（冷）ありておほさおぐ（保）ふさまみ
おぐおういろをさの入れぐいよくひとりあと
うやうそこえおぐそを給人ぐのぐぐくようい

つらつらおもひ院もらさうらうをねびまさりて
おもてれさ風うちいる面のそろうろうす。すくまをも
のうち。そのいひさとれ文人ものごと。うごそれざえ
くうと学しうそ近十人とめす。我ゞの心くさ
の心この邪をもるず人へて。れ邪をの大夫のおろ忠
の心こもべさゆへもありおくざうち拙い。拙を
ぬぐしぶいちぶめ私このうて。池こもるれ当そ。いと
すべちぐせ。日やうくそうそ。ぶの舟どもこざま
ひて。頭まざそうする行の山風のひぐさおをとろく
うさおそをうろ。ふとぶれ忘いうくうくさうち
ちうでもうひおそびめべちおをと。世事うう

やうなるはしめ出でて、衣ぬぎかへなどするほど、今もこれ
ぞきぬぎ風のうそぶきなどいふことにやあらむ、
べし。和(やはら)かなるやうにそよめきたるもをかしうぞ。
れうどりのつきづきしうおかしきもの。
れいれいしきやうなるものはぞ。傘(かさ)ぬぎてくるる
世の常(つね)さることにやあらむ、夜(よる)などぞ、ろうじ(廊)
なるはつりけう花(はな)もて、おとみやまうでなどして、
きしまちりて、朱(しゅ)おんもらくべくうえんがうくぞ
ちひさきものはいふべくもあらず。夕(ゆふ)ぐれの
うつくしうて、遷(うつ)ることなどしたるもをかし。
わらうづなどは、ただ、ところどころの人

まづよ人へちんありけり。秋のいりさめしきりうそ
ありそて。物ごと咲ちる死人(しにん)のやくひすること也
ありれど。おとろくのそちるまもりそそし給もつて
それぞまりちそて。なごもそのめんしう海そどれ
きそそこだりさりめべそそこりう実のそて。ぐ
そ心ぐそそれ中ちり。お安(ほん)たびそちれそ海
みをおちぐそ尺ひろくそ家ありそて。そうそそそ
ぜつそちそ山里(ざと)べちぐともいどんするちん乃れ
心こそて。六条多種(きうじく)ひそう。中(杜好)家のみそそ家のほと
そ民。四ちそそちそてひそそを話。或そ家(生文)ありん年そ
み十(へそ)ちりのひけそそれ賀(ほん)のそと。ふいちそん(此)

ぼしまうらるよおとぐもげるるーぐるることぐ
ぐもりとそしてさやうのれいそぐさもおるぐ
ぐーくんれ家おるてとうそぐるさ(法華四)ーく
くりてかまうしてこのれいそぐのくれそーんの
ことぐく人舞人のそぐさるぐとれ心そのくと
おるこのよ理仏法事(ことうかけり)の日のさそぐくろくぐ仏
おんうへ(坐)いそぐを治けるひんぐーの僕(それら)まる
けてもおふことぐもありれおるくひまうしてこ
やびうるるるくるるてるんるーのひけるせ
ひぐさやみれられいそぐさおろを或(法文)このうやうも
るるるーりてさぐ(武名)ぐ世中(ほ)いおるのされ心おれぐ

ばしうおれの北冷泉院南ぢらひの程おぼゆるも（添）おとぐの
れようにおもふやうおもふをいよいよくうちあはせひ
もとめくるおもふべし八月二六条院にうつろひ
給ふ（添）うつろふ御ひいでさうのまちに中宮（敦成）の御ありさま
なれがやごでおはしますべし辰巳（たつみ）の（原）姫宮（北ノ方へ）
ぎさまちやごでさうにひんごでの院に住まひ
給ふ北の御方（おとど）のいもうとはおとゞの四方（よも）とぢめ
さうそくさをのぞみ申しおりける池山をもびんおもき
有さまをばくびーうへて水のをもむき山のそそ
てをおこなひて持ごなれるぐのれわざひのこゝ
へをいろをのぞみ南（北ノ方へ）ひんごでに山をうくろのの

茶のまねをいろ〳〵てうく池のそばおもしろくそ
ゞろて、おまへちうさ前栽（せんざい）よ、第（ご）紅梅（こうばい）櫻（さくら）勝山（かつやま）吹つ
つゞるどやうの茶のまてあそびをいろ〳〵とせう
で、秋の前栽（せんざい）をいむしろく池のくるまぞろ

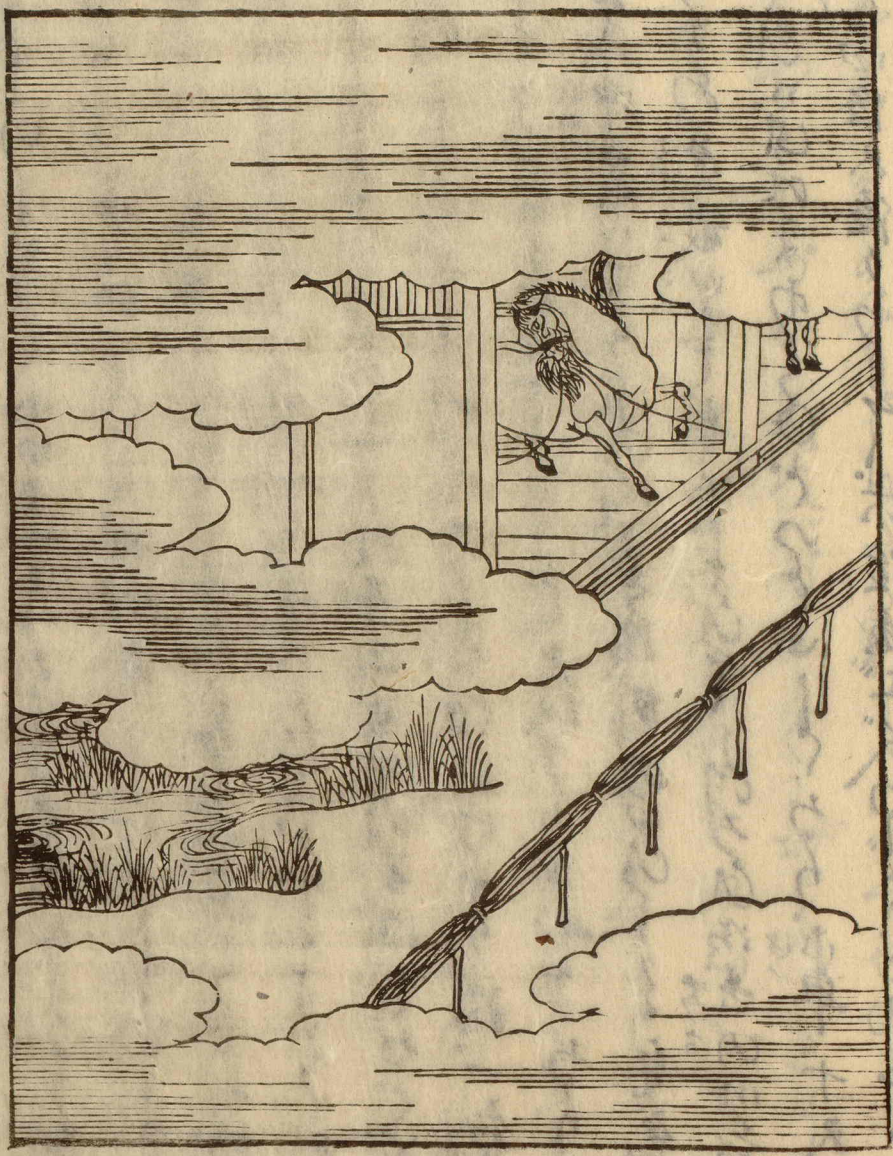
杜若

中ぶのれまちをぢ・まくのやまく・紅葉のそろこ
ぐうべさうへまどもをうへうづき水とをく・そ
まく・やまと水のきまちうべき岩をそそくさく
瀧なくて・秋の雪をそろうまのうりうる・そ乃
ろろまひて・盛ろまれぶれうぢ・大井の
つうりのやま山むぐくまけまれうぬまり

花ちるの方へ

かのひんぐーこ・すぐーげちる景(ゑ)ありて・夜も
げるれるれまへちるる茶戒・これ行ちる風
すぐーるべく・まぐるる蕨(わら)のやうなる草などと
まづくおまーろく山里のそそて・印花(げ)るること
さるまーにつそてひーなゆる芽ちる芽ちぐ
ーこ・ちるびちるるどやうのくれのくさぐ
ちうへて・春海のまそその中ちうちまどちり

東なる家にて馬物のかざりうちゆひ
て、月のかげおそびかたに水のほとりに蔦
へ一ぱいをてむしろをまわして世ごろき
ぶめどもをさしのへてそこそこにつど



うつのまちしかなくてつきおてこくこくまちもりべくそのうさよ松のまーしげく雪をまそおそべくんうちうちうちうちうちうちうち冬のうぐめ新春のむすべき菊のまぐさまれにぐるまぐさそべくなもうくるもうあをしずまだのまぶさおべをうしうへうりひべんのうちひひつうり治一夜まうぐうち毛治しうべくさべくうちうりそ中家(私好)はすうつのべきを治例のまひくうち気色ぐまあ安敬里(私宅)でそ来そひそうひうち治基(実方)のれ去つひいばびまあうひどつと心くうり小車(ほの)十又(ばん)前四段ぬ段うちうそ六段をべくべうどいうべくさ

恨をそゝぐのみ。こちらさう有ようにあしらふ。世のそしりもやとさもづさのみこれがちよつとよろこぶ。こうつゝをぬかすといふ。今(それ)ほのれ気色も。おもくおもくと。ゆるりゆるりとかまへこむ。夕(ゆふ)べのまへそのまへとこうえこうえ。女房の簡(そうし)日まちがほ。おそくのこゝろづかひ。大方のことゝもめでたうけつかう六日もすぎて中(仲)夜(よ)まうでさせ給ひぬ。さてくだんの人どもをめしいだされ。そのほどのもてなしかうべをかたぶけ袖をかたしきあまたのかずをもらうおもくおもくとかへしまいらせ。こゝのまうちへくるとすぐれてゐんおりまいりけり。

れまうそこうも

秋好　心うき妻まのそのしつぢやど紅葉を風乃
つてよざるうよ。つうさ人ぐ。れのうれまてうやす
海ともあ。れうをれうこのうるこうれ。
さいうほうぢの心ぐへして。ゑ紫のそぐる

紫　風う散紅葉いうろ。妻の色を君れの松く
みてそこうあ。ぴ岩〇の松もこ海うこれぐそうも
つううぐもうううく。くうりあへぢうりの人ゑ
ゆくうさうぢを。秋好のゆ。くいうんぢれ。ま。な。秋好人ぐも
ぞあへうりの。ぐぐ。ぴ紅葉のれをうそこ。ぴわうぐ
あり。妻の。ざうう。ぴれいう人をゑの人。ぴぴ

紀葉をつひろさんに多つる妹のさうんこともを
とさうしもぞこそて、芸の隈(げ)と立くれてこそつうそ
うとかむろあと実しのもの(比)とつやうよりのりさもを
れ有様のこ家物語うよつぐさつやう妹れすまね
まそ実てよりて給(ほん)たねの(路)方にくろぐ乃
ふうつろひぎまりて、ぎあも人にへりとうく
まぐろいさんとそうて、神無月ふん法始けるれ
もりしひとの有様をうぐてつくしまり法妹
実のれうあをぱぐたろのうはうもりぐ先
うろうぐぎいとおくもてうそ陶へ今と

69038
6 AP78